

春夏秋冬

夏らしい夏はもう絶望的なのだろうか。真っ青な空、モクモクとした入道雲。短パン、ランニングシャツで近所を駆け巡り、小川で水遊びをした。そんな夏のイメージは、この夏全くない。いや、ここ10年ない。昨年までは35℃を超える猛暑、猛暑で、今年の夏は曇り、曇りの毎日。異常気象はもう慣れっこになってしまった。異常が続けば、これが当たり前の夏ということなのだろうか。

こんな夏のある昼下がり、空がいきにかき曇り、激しく雨が降り始めた。この時、幸いにも私は都心の高層ビルの中で、雨に降られる難からは逃れることができた。そして、雨が止むと、ビルまたビルの摩天楼の上空に虹が架かった。虹は町や田舎で見たことはあるが、大都会の遭遇はあまり記憶がなく、何か異界の景色のようで、しばし見入ってしまった。都会の空気がきれいになったのか、たまたま雨で汚れが洗われたのか、無機質なビルに架かる虹は鮮明でやけに美しかった。夏の思い出も、田舎からだんだん都市化していくのも致し方ないのかもしれない。

今、外では選挙カーが通り過ぎ、候補者の名前が連呼され騒がしい。政治が変わり、未来ある日本に変わるのだろうか。地震は多発し、夏なのに新型インフルエンザ流行とは不気味だ。明日の希望を確信できないまま、今年の夏は終わった。

まっすぐな道の先っぽ赤とんぼ 風月(M)



循環型社会研究会 (Workers Club for Eco-harmonic Renewable Society) とは

循環型社会研究会は、10年来有志で環境問題現場でのフィールドワークを中心に活動しておりましたが、2002年の7月3日に特定非営利活動法人の法人格を取得しました。
「次世代に継承すべき自然生態系と調和した循環型社会のあり方を地球的視点から考察し、地域における市民、事業者、行政の循環型社会形成に向けた取組みの研究、支援、実践およびそのための交流を行う」ことを目的として活動しております。単に、資源のリサイクルや物質循環に注目するだけでなく、自然生態系と調和した未来世代にとっても維持更新が可能な仕組みを備えた具体的な地域における循環型社会づくりと、それを担う“循環ワーカー”の養成がわれわれのテーマです。

循環研通信／JUNKAN No.24
2009年9月発行

発行人：山口 民雄（代表）
編集責任者：永井 洋（事務局）

特定非営利活動法人循環型社会研究会
東京都中央区京橋 1-9-10 フォレストタワー 株式会社ノルド内
Tel：03-5524-7334 Fax：03-5524-7332
Eメール：junkan@nord-ise.com
HP：http://www.nord-ise.com/junkan

JUNKAN 循環研通信 NO.24 2009 SEPTEMBER

Junkan Workers Club

特定非営利活動法人 循環型社会研究会

2008年度循環研セミナー

助け合いこそエコアクション！

講師：ハッタ ケンタロー氏（環境エンタメ・デザイン&プロデュース）

日時：2009年2月9日(月) 18:30～20:30

会場：ノルドスペース セミナールーム（東京都中央区京橋 1-9-10 フォレストタワー）

はじめに

皆さんに対して僕がどのようにお役に立てるかということが今日の僕のテーマだと考えると、「どのような考えで皆さんがNPOを運営しているのか？」を知ることが大事だろうと思いましたので、はじめにこの循環型社会研究会についてホームページに書いてあることを僕なりにまとめて図にしてみました（次頁参照）。

まず、皆さんは「視点」が「地球的」ということで、すごく大きいですね。そして、テーマは「地域社会づくり」。「Think globally, Act locally」ですね。しかも「次世代に継承すべき自然生態系と調和した循環型社会」の形成を目指している。

循環型社会研究会の目的は、こうした社会をつくるための「市民、事業者、行政と研究、支援、実践、交流」です。そして循環型社会研究



会の役割は、まさに今日のようなセミナーやワークショップ、フィールドワークを通じて会員の育成を行うこと。すなわち「わたしたち会員は循環社会づくりの担い手、循環ワーカー」であると。素晴らしい考え方のNPOだと思います。

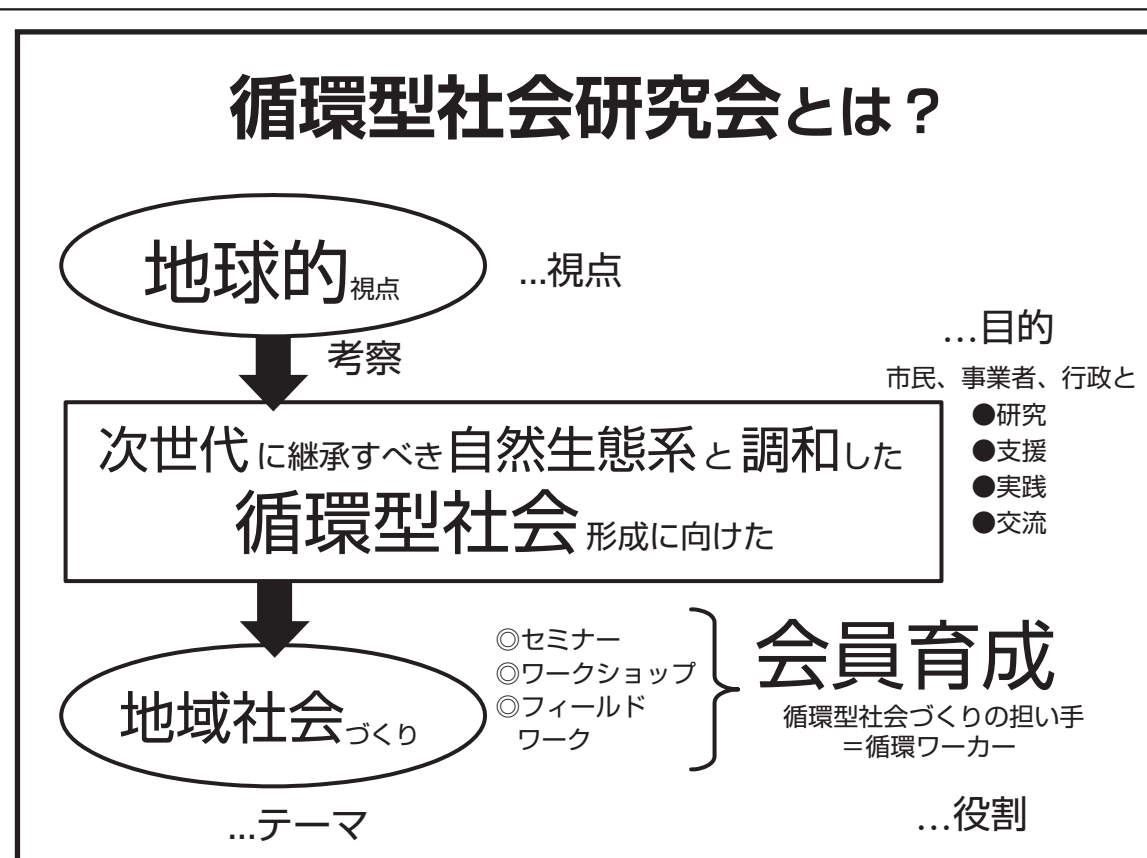
CONTENTS

01 2008年度 循環研セミナー
「助け合いこそエコアクション！」
講師：ハッタ ケンタロー氏（環境エンタメ・デザイン&プロデュース）

23 ワークショップ活動報告
エココミュニティワークショップ／水循環ワークショップ

12 2008年度 循環研セミナー
「人間復興の経済社会へ」
講師：田村 正勝氏（早稲田大学社会科学部教授）

24 春夏秋冬



今日はその循環ワーカーの皆さんを前にして、僕が何かのヒントになるようなことをお話できればと思います。

1. これまでに手がけた環境活動

まず、僕がどういう人間か、どういう活動をしてきたかを紹介しながら、今日のテーマである「助け合いこそエコアクション」に結び付く過程を共有させていただければと思います。

私は「ハッタケンタロー」と申します。2002年に、NPOの世界に飛び込むにあたって、本名を漢字で書くと重々しいし、自分がカタカナ商売に憧れていたこともあって、名前をカタカナで名乗るようにしました。

生い立ちとはいいますと、私は1969年に、京浜工業地帯のある横浜市鶴見区で生まれました。父親は富山の工業高校を出てから上京し、日産に勤めておりました。母親も富山出身で父親とは同級生でした。

生まれた場所、ルーツというのは自分のアイデンティティーとして大事だと思うのですが、僕の場合は、高度成長期の工業地帯で、田舎か

ら上京して来た両親の間に生まれたということが、非常に重要な意味を持っていると思います。

現在の活動をはじめるきっかけは、NPO法人アースデイマネー・アソシエーションという組織に所属したことです。

アースデイというのは地球の日（Earth Day）。マネーはお金です。当時、地域通貨ブームというのが起こりました。地域通貨はコミュニティマネーとか、コミュニティカレンシーとか、エコマネーとも言います。

社会実験として、「アースデイマネー」という独自の地域通貨を作って渋谷で流通させようという試みが2002年から始まりました。

ところで、みなさんも覚えていらっしゃると思いますが、1990年代の末というのは社会的に暗い時期でした。例えば1998年末は山一證券が潰れたりしました。私は2001年までゼネコンの営業をやっていて、保守などの問題で、胃が痛くなるような毎日でした。

そんな毎日を送っている中、地域通貨に出会い、地域通貨を通して地域をよくしていこうと

いう活動を始めました。アースデイマネーは、1つはカード、もう1つは昔の切符大のものがああり、現在100店舗ほどで使えます。100店舗で使えるというのは特別なことではありませんが、この通貨をどうやって手に入れるかという方法が、当時としては斬新だったと思います。

その方法とは、NPOやボランティア団体の活動に参加するとそのお礼として通貨がもらえる、または、NPOに寄付をするとその額の通貨がもらえるというものです。これがエコマネーと呼ばれる所以ですが、何か環境に対してアクションをするとその対価としてもらえ、それが渋谷のカフェや美容室などで使える仕組みです。

さらに、それらのお店が受け取ったお金も流通するんです。クーポン券みたいに一方通行ではなく、循環するような仕組みです。

実は「渋谷川ルネッサンス」の活動に対してファンドを募ったり、ボランティア参加を呼びかけるツールとしてこの通貨を使っていこうとしたのです。

渋谷川というのは小さいドブ川で、下流のほうの港区に入ると古川という川になります。渋谷駅より上流はずっと暗渠になっていて、上流は宇田川、原宿の竹下通りの下も、渋谷川の水系になっています。

小田急線と代々木公園があってNHKがあり、春の小川の碑があるんですよ。「うさぎ追いし…」の歌「故郷」を作詞した国文学者の高野辰之という人がいたんですが、その人がこの近くに住んでいて、お孫さんと当時このあたりを流れていた河骨（こうほね）川を見てこの歌を詠んだんです。

私たちは渋谷川ルネッサンスの活動を通して、エコマネーの力を使い、春の小川を取り戻そうとしました。その前年まで国土交通省の河川局長をしていた尾田さんという方の力を借り、NPOの力を使い、エコマネーをファンデーションとして使っていこうとして始まったんですね。2002年のことです。当時は不景気でしたし、エコマネーとか社会デザインとか、そん

なことをする人はほとんどいませんでした。

春の小川を取り戻す方法としては、2つあります。

1つは、護岸の部分に三宅島の溶岩でできたパネルを張る方法。溶岩ですから多孔質で、そこに植生が生えるんです。

もう1つ、暗渠の部分については、どこでもいいから1箇所ふたをはがして、日に当てる。要するに春の小川をどこでもいいから再生するということです。そういうことががんばってきました。

ソウルの清溪川（チョンゲチョン）のように、高架道路を取り払って川を復活させたり、日本橋の再開発に当たり、日本橋に空を取り戻そうとか、水辺をどうするかといった話がここ何年か出てきています。我々はかなり早い段階からそういったことに取組んでいました。今までのNPO団体とは一線を画すために、社会のニーズをこういう形で、社会デザインにつなげるということ、いろいろなサポートを得ながら実現していました。

そんな中、2003年に原発の事故がおきました。国交省の河川課長さんから2003年6月初旬くらいに尾田さんを通して、国交省の関連機関の土木研究所がユニークな試算データを出したから聞いてやってくれないかという話があったんです。その試算データというのは、東京都の散水可能な面積に、1平方メートル当り1mmの水深の水、つまり1リットルの水をまんべんなく撒けば、どうやら電力消費で4%、気温が2度下がる可能性があるというものです。NPOでそれを何か形にしてくれという、かなり無謀な依頼でした。

実はそのとき、江戸開府400年でした。さらに、当時は江戸のリサイクルという文化が言われてはじめていた時期だったので、同じ江戸の文化、打ち水を「江戸打ち水作戦」として同時刻にいっせいにやったらどうだというアイデアが私どものNPOから生まれました。

何か形にしてくれと言われてから2ヵ月足ら

ずで、いろいろなネットワークを使いながら、いろいろな方に協力いただいて、いろいろなメディアに声をかけてそれをニュースにし、皆様の知るところとなりました。

1年目は冷夏で雨ばかりでした。本番の8月25日も実行が危ぶまれていたんですが、見事に晴れて決行とあいなりました。

その日は、お台場の大江戸温泉物語、墨田区の墨田地蔵坂通り商店街、東京都庁、大鵬部屋の前など、賛同していただけた所、あとは、我々がやりたいと思うところで、ゲリラ的に打ち水を行いました。ゲリラ的とは言っても、事前に念入りにプレスリリースなどで知らせて、それぞれの個所でメディアの方に来てもらって、このイベントを盛上げる下準備を行いました。

それを見た全国の市町村や、NPOの皆さんが、自分たちのところでもやりたいということになって、あれよあれよとここ3年くらいの間に700万人が参加したと言われています。国民も9割くらいは何らかの形で知っているという、それくらい認知の高いイベントになりました。やっている私たちは実感としてわからないものなのですが。

打ち水の科学的な効果について考えるのも大事なことです。実際に気温が下がらなくても、日本の夏の風物、つまり打ち水、浴衣、風鈴、金魚、団扇といった夏のツールが、感覚的な涼しさと呼びこむことがアンケート調査の結果からもわかります。

日本古来の文化では、朝と夕方に打ち水をするという習慣だったんですが、メールで「日中、水を打ったら、蒸し風呂のようになった。殺す気か。」といったような苦情を何件もいただいたことがあります。私は「これは社会実験だからやってみなければわからない。」「これだけの人数でいっせいに水を打てば、気温が下がるかも知れないじゃないか。」なんていいながらも、誠心誠意返事を書いたのは思い出深いことです。

あと、重要なのは2次利用水で行うということです。風呂の残り湯とか、エアコンの室外機

から出る水などです。イベントの時は、下水道局から再生水をいただいて、それを打っています。

ちょっと脱線しますが、秋葉原で打ち水大作戦をやったとき、オタクの人たちが、「メイドの子たちと打ち水やりたい」って言ってきました。オタクの人がエコアクションをするなんて思っていませんでしたから、我々もちょっと興奮しました。当日、メイドの格好をした女の子たちが「ご主人様、打ち水しましょう」みたいな感じでやるわけです。その水が、女の子たちが前日入ったお風呂の残り湯ですから、ファンの人はすごく喜ぶわけです。変態かつ！て感じですけど。

そんな風に1つのエコアクションが形を変えて、1つのエンターテインメントになっていくのを見て、やはり「楽しい」ってことがいかに大事かということを感じました。

「打ち水大作戦」で味をしめた私は、次に油の問題に着手します。墨田区に染谷商店という天ぷら油のリサイクルをやっている店があります。1996年から1997年にそこの染谷会長さんが、大豆から作ったBDF（Bio Diesel Fuel）という植物由来の燃料で車を動かせるのを知り、同じように自分たちの扱っている食用油の廃油で燃料を作れないかと思い立ちました。いろいろ大学の先生などに話を聞いて回って、どうやら「作れる」ということがわかって、実際作ったそうです。

はじめに試運転したときは、会長が運転したんですが、誰も一緒に乗りたがらなかったそうです。会長が乗って行ってしまったきりなかなか戻ってこないの、どこかで事故でもあったんじゃないかと心配したそうですが、実は快適だったのです。ずっとドライブしていたそうです。この会長、面白い方で「これで石油メジャーから狙われるんじゃないか」と心配して、夜寝られなかったそうです。

私は、「アースデイマネー」「渋谷川ルネッサンス」「打ち水大作戦」とNPOをやってきて、さらに「トージバ」という活動で都市と農

村の交流をやっていたんですが、そこでグリーンツアーをやるときに、バスが必要になり、このバスの燃料になるBDF（染谷さんはVDF：Vegetable Diesel Fuelと言いますが）を自分たちで集めようということになりました。

この企画は「東京油田開発」と銘打ちました。知らない方は一体東京のどこに油田があるんだと思われるかもしれませんが、それは皆さんの家庭にある天ぷら油ということなんです。

ところで、4月22日は世界的にアースデイと言いまして、地球のことを考えようという日になっています。1970年のアメリカでは、いろいろな公害問題があり、ある大学の先生と確か議会の人が、何か平和についてのイベントを起こそうと始めたのがきっかけです。それが広がって、この日をアースデイと呼んでいろいろな所でイベントが行われるようになりました。代々木公園でも、今年は4月18日と19日の土日にイベントをやります。

2008年の代々木公園のアースデイのイベントには12万5千人が集まりました。皆さんの中にはエコプロ展に行かれた方もいるかもしれませんが、あれが17万人です。1日あたりの平均ではアースデイの方が多くかもしれません。

この規模のイベントですから使うエネルギーもかなりのものになります。そこで使われるエネルギーも、この天ぷら油で自給してまかなおうと考えたのが「天ぷら油リサイクル大作戦」です。アースデイの2ヵ月前から天ぷら油を回収し、皆さんの力でエネルギー自給しましょうと呼びかけました。油を捨てるのはけっこう困りますよね。トイレや流しにも捨てにくいし、土に埋めるといったって、庭がないですからね。ですので、非常に喜ばれました。また、健康志向のせいか、最近、油が余るんですよね。お中元、お歳暮でサラダ油もらったら、ずっと余って消費期限切れになっちゃう。それで、ずいぶん感謝されました。横浜からベントに油をのせて持ってきた人もいました。「どう処分しようか困ってたんです」なんて言ってね。そういう未使用の油はBDFにしやすいんです。

結局1.2トンの油が集まり、アースデイ東京でエネルギーにしました。ディーゼルの発電機を動かすのに大体1トン分ぐらいのエネルギーが必要でした。

今はまだ、風力や太陽でエネルギーを得るのは大変ですが、天ぷら油なら確保することができます。だから皆さんも何かイベントを実施しようとするときには、BDFの利用を考えてみてください。だいたい天ぷら油1000リットルで、2.6トン分のCO₂が排出されますが、植物由来なのでカーボンニュートラルだと考えることができます。

水と油ときたら今度は土でしょう。土についても、加藤登紀子さんと活動をやってきました。加藤登紀子さんは旦那さんの藤本敏夫さんが獄中にいたときに結婚したのですが、藤本さんが刑務所から出てきたときに最初に思ったのは、農業をしようということだったそうです。2007年には「種まき大作戦」を始めたのですが、なぜ2007年かというと、「2007年問題」というのがありましたね。そう、団塊の世代が大量に退職したんです。そうした人々には、今後の生き方のテーマとして、帰郷、帰農したいという方が結構いらっしゃいました。

もうひとつ我々にとって重要だったのは、世代を超えて団塊ジュニア、団塊ジュニアジュニアが土に向き合うということです。団塊ジュニアが30代になり、子供を産み始めた。実は私にも2004年に子供が生まれました。

2007年問題が来ることが分かっていたし、加藤登紀子さんとは、トージバの取組で縁があったものですから、藤本さんの果たせなかった夢を我々で実現しましょうと口説いたんです。そして同じく歌手である娘、Yaeさんの世代にバトンタッチしていきましょう。そして彼女を実行委員にしまして「種まき大作戦」を始めました。

実際にするのは種をまくことだけです。自分たちで自給しましょう、自分たちで土の上で作っていくことを始めましょうと呼びかけました。そういった流れの中で、去年は大豆を作っ

たり、棚田チャレンジとしてお米を作ったり、農業者じゃない人に呼びかけて農業者じゃない人の農業のありかた、また農業者を応援する流れを作っていこうとしました。

2007年から「土と平和の祭典」という都会における収穫祭というイベントを、加藤登紀子さん、Yaeさんを招いて企画しています。去年は10月19日、日比谷公園で3万5千人くらい集まりました。

そこには全国から農業者を集めました。おもに有機農業をしている方ですが、年に一回、農業者が仲間に会う機会も生まれますし、都会の人が有機農家に会うチャンスでもあります。ということでなかなかいいイベントだったとの評判もいただきました。

この「土と平和の祭典」の前に何をやってきたかという、「アースデイマーケット」という朝市をやっています。東京という国際都市の中には、バリなんかにあるようなマルシェが無いじゃないですか。交流の場にもなっていて、観光客が行ってもそこの土地の風土がわかるという場所がない。特に農家市場がないと、アースデイマネーをやっているときから思っていて、アースデイマネーを使う場所も欲しいということで、3年前からやり始めたのがこのマーケットです。

さて、ここまで説明して、一体「お前は一体何で飯食ってるんだ」という疑問をお持ちの方もいると思います。お答えしますと、僕は基本的にはデザイナーです。こういうイベントをやっていると、いろいろなところうちでもイベントをやってくれと声がかかったりします。

こういうイベントそのものを行うには、いいイベントだと賛同してくれる企業から協賛金を集めます。いいイベントというのはきちんと社会に還元できて、企業にとって協賛するメリットがあるイベントです。昨今なかなか難しいですけどね。

色んな運というか巡り合わせやタイミングがあって、私は恵まれていると思います。

話を戻しますと、このアースデイマーケットは毎月一回、代々木公園でやっていて、1万5千人から2万人くらい集まります。参加する農家の方は有機農家とは限りませんが、ある程度環境配慮型の農業をやっている、グリーンファーマーです。

このことは、非常にたくさんのメディアに取り上げられましたし、多くのファンの方もつきました。

先ほど紹介したトージバは、「大豆レボリューション」というプログラムもやっています。大豆の日本の自給率は5%しかないのですが、これでも以前よりは良くなったんです。1970年代は3%でしたから。これはアメリカから大量に大豆が入ってきたからです。日本にもともとあった大豆は「地大豆」と呼んでいますが、これがつぶされ、海外の大豆が油を作ったり肉を作る飼料として入ってきました。日本の食生活も油っぽいもの、肉食になりました。

日本にもともとあった「地大豆」は、日本の風土に合っていて、地方によって赤いのもあるし、黒いのもあるし、色んな大豆がありました。大豆レボリューションは、そういったものを現代に復活させようとしています。復活のさせ方としてユニークなのは、農家だけではなく都市に住んでいる人も一緒になって、農家さんと一緒に地大豆を育てることです。そして、有機・無農薬で地大豆を作り、最終的には味噌に加工する。それを「手前味噌」という名でイベント販売するという取組みをしています。

次に「バンブーファクトリー」の取組みについて紹介します。今、里山が竹害にさらされています。竹がどんどん生えて、竹の重みで倒れる。それが問題になっていて、その竹を有効利用してテントを作っています。

いま、この竹テントをイベントで使いたいというところに行って、竹テントを作るワークショップを全国で展開しています。

いろいろと紹介しましたが、思えば、打ち水が僕にとっての教科書ですね。その教科書にの

っとって、これまで色んなムーブメントをどうやって起こせばいいかと考えてきました。油だったり、土だったり、竹だったり、そういったことで全国的に広がるノウハウを提供することが僕の仕事だと思っています。

また、文化もリサイクルしようということで、無声映画の活動弁士、ミュージシャンを結びつけた活動を開始したりしています。

そのほかにも、ゴールデンウィークをグリーンウィークと呼びましようという活動もしています。だって言い方がおかしくないですか？黄金週間って。「みどりの日」がゴールデンウィーク中にあるのに、誰もグリーンウィークといわない。略せばどっちもGWですしね。この活動は、縁があって小池百合子さんと一緒にやらせていただきました。

また、土日というのは年間100日くらいあって、祝日もあわせて年間30%以上は休みなんです。今のエコアクションは平日も休みも関係ないですよ。休日には休日のエコアクションがあるんじゃないかなと思ひ、休日はカーボンオフする生活（カーボンオフセットじゃありません。言葉も軽い方がよく飛んでいきますから。カロリーオフなんて言い方があるように、カーボンオフって言い方で、エネルギーダイエットみたいな感じでね）を提案しています。

さて、では今年のグリーンウィークは何やるのかということですが、実はまだ決まっていません。皆さんにこの言葉をはやらせてくださいってことくらいなのですが、今年からぜひ、ゴールデンウィークをグリーンウィークと呼んでください。

2. 基本となる考え方

そんなことで、すごく色々なことをやっていますが、僕のやっていることはある考え方に基づいています。その考えの部分を皆さんと共有できたらなと思います。

ほんとに僕の活動自体は多岐にわたっていて、まだ説明しきれっていないものもあります。例えば、エコマネーを港区で流通させる事業

を区から請け負っています。エコマネーをつくるためにはその原資が必要で、その母体となる団体を作るという仕事も同時に請け負っています。「みなと環境に優しい事業者会議」というのがありまして、現在70社ほど参加しています。この事業者会議の事務局はアースデイマネーが請け負っています。

アースデイマネーは、はじめ地域通貨で社会デザインをしようとして始まったのですが、今では社会デザイン全般に手を広げています。

何でそういうふうに変わってきたのかというと、私1人がそうした訳ではなくて、環境問題をやっているといろいろなネットワークのなかでいろいろなことをやらなくちゃいけないようになってきたからです。

というのは、やっぱり企業だと儲けられないことやったって意味ないわけじゃないですか。給与も払わなきゃいけないし。でも、儲けられないことっていっぱいあります。例えば企業にとってみれば、水をきれいにしたって儲からないわけですよ。そうすると、行政が税金を使ってやらないといけない。では、公のことだから行政にやらせればいいじゃないかという、行政だって、まずは予算がないとできないし、それを仕事としてやらなきゃならない理由もないですよ、要するに自らそれを仕事にしようとはしない。住民が求めていることはやりませんが、求めてないことには手をなかなか出さない。これには、どの部署が担当なのかというセクションの問題もあります。

そういった問題に対して、NPOというのはひとつの有効な手段です。だからNPOは元気なんだと思います。儲からないことをやり、仕事にならないことをやる。だからやる事が膨大なんですよ。打ち水なんか企業の人が行うとしたらアウトです。どうやってそんなことで儲けるんだと。行政だって、実績もないのにそんなことで住民動かしているのかなんてことになるんです。

さて、ここからは私個人と仲間の考え方ですので、同意していただかなくても、若造の言っ

ていることだと聞き流してもらっても結構です。

実は私には環境の師匠がおります。吉田昭彦という、「環境道のススメ」という本を書いた人です。その師匠のことを自分なりに解釈した哲学みたいなものですが、まず、環境問題とは2種類あるんじゃないかと考えています。1つは自然環境、いろんな生き物がいるということ。もう1つは社会環境ですね、色んな人間がいるということです。どうも世の中の環境問題というのは、幼稚に見えたりよく分からなかったりするのにはここに問題があるんじゃないかなと思っています。自然環境の問題なのか、社会環境の問題なのか分からない。だからそういう区別が大事だと思います。

自然環境の関係や繋がりにおいて共生することが、自然環境のエコアクションです。生物多様性だとか、温暖化、遺伝子組み換え、異常気象、砂漠化など、人間がいるために引き起こされるものもありますが、色んな生物に影響を与えるという意味においてこれらは自然環境の問題です。生物が多様性の中で共生する方向に導くのが自然環境のエコアクションだと思います。

では社会環境におけるエコアクションは何かというと、ユニバーサルデザインであるとか、助け合いだとか、人間社会における循環です。それが共生する方向に行くのもエコアクションじゃないかなと思います。

このように、エコアクションには自然社会のものと、人間社会のものと2つあるという考え方に基づくと、いろいろなことが言いやすくなるんじゃないかなと思います。

また、エコアクションをするために何が大事かということだと思います。教育とは何をするのかといいますと、学んだり遊んだりということだと思います。学ぶ場所は学校、家庭、地域、社会と、自然です。

教育とは、考え、思い巡らせ想像して、それがそのとおりであるかないか体験し、実感することの繰り返しだと思います。そしてそれが実

社会でどれだけ役に立つのか、実践的にやってみなければ、教育になりません。

教育というのはその人の背景にある文化と密接に結びついていると思います。ここで言う文化とは、関係や繋がりを作ったり壊すことを促すことです。つまり、文化というものはパソコンやテレビ、新聞、お金、ファッション、流行や、社会を取り巻く関係、つまり我々がどこにあるかということを決めつけたり、あるいはこの関係はダメだということによって壊すことです。経済というものも文化の一つじゃないかと思えます。いろんな自然環境、社会環境を考えたとき、文化のありようというのは非常に重要だと思います。

今日みなさんと共有したいことがあります。湯布院に中谷健太郎さんという方がいらっしゃいますが、この人が言ったことに非常に感銘を受けました。人間には大事な4つの「事」があって、その中に我々がいると言うのです。

皆さんが「仕事」をされている中で、地域のこと（「出事」）をどれだけやっているか。そして「私事」。例えば趣味や友達つきあいや恋愛をどれだけしているか。あと「家事」、家のことをどれだけやっているか。家族のことや家庭内のことです。

この4つのバランスで生活が成り立っているということに、私は共感を覚えています。

私がこの中で特に大事だと思うのは「出事」の部分です。NPOというのは、きっとこの「出事」の部分を一生懸命やっているのだろうなと思います。

ボランティアってよく言いますが、ボランティアをしたときに何がメリットかといいますと、例えば村の祭りを考えてください。村祭りに、村のAさん、Bさん、Cさん、Dさんが参加し手伝ったとします。Cさん家が酒屋だったとします。お祭りが終わって打ち上げをするときに酒はどこから買いますか。そういうとき、Cさんのところから買いますよね。今は格安の店もありますが、やっぱり他のところからは買いません。これは大事なことだと思っています。

我々が例えばボランティアサークルだとして、川のごみ掃除をしようとなったとき、掃除にもいろいろ道具が必要ですね。ボランティアだからみんなお金をもらわないわけです。みんな色んな役職や立場があっても、川掃除をしたときにみんなフラットになるわけです。自分のやれることしかできないわけですから、力のある人は力を使う、気を遣う人は気を遣う、車の運転できる人は車を運転する。これはすごく大事なことだと思うんですが、「出事」の中では、ぱっとミッションが見つかるってことですね。いままでは、ずっとどうやって儲けるかって考えてきて、ここにきてこの「出事」に世の中がようやく目を向け始めていると思うんです。

ボランティアをやっていて思うのは、例えば背の高い人は必ず高い所のものを取らされるんです。仕事だとそういうのは無いじゃないですか。忙しいのにいちいち高いところのものを取るために頼めないですね。仕事は役割が決まっているから。

このように、仕事と「出事」はちがいます。「出事」は「出事」の合間にも役割が必ずあるんです。例えば、私は昔、営業をやっていて、デザインの勉強は全くしていなかったのですが、昔は貧乏だったので、イベントをやるお金がなくて自分でデザインしていたんです。そのうちハッタさんのデザインいいですねと言ってくれる人もいたものの、結局1年間で全部食いつぶしちゃったんです。収入ゼロです。これは生きていけないってことで、どうしようかと思っていたら、ボランティアのつながりで、私に仕事をくれた人がいたんです。

何が言いたいかというと、皆さんの中には循環型社会を形成するため、ボランティアとして活動している方もいらっしゃるし、そうじゃない方もいらっしゃると思いますが、まず、仕事としてやるのかそうじゃないのかというのは非常に大事なことなんです。

今、学生さんの中で、ソーシャルベンチャーというか、社会的な問題を解決することを商売

にしようと考えている方が結構多くいらっしゃいます。だけど、僕は、それは仕事であって、「出事」じゃない。それでは社会の根本的な問題は解決できないと思います。仕事というのは糧を得ることじゃないですか。仕事は「出事」になったら、皆さん会社辞めたほうが良いと思います。お金もらえないんだから。地域の「出事」は無償が前提。無償であるからこそ、いろんなつながりができて、僕だったらデザイン、さっきの酒屋さんだったら酒屋さん、そういったつながりや、コミュニティが「出事」中のできることで、仕事も確保できるようになるんです。

もちろん、私事も家事も皆さん大事にしていると思います。家事で皿を洗ったり、子供の面倒を見たり、親戚づきあいもするでしょう。例えば親戚付き合いが金にならないからといってやらない訳にはいかないでしょう。また、きっと私事は金にならなくても好きなことだからやりますよね。

いまの社会がいびつになっているのは、4つの「事」のうち、「仕事」が肥大しているからだと思います。特に男性社会。儲けなきゃだめだと肥大しているように見えます。

一方、NPOの活動の中で非常に大事だなと思うのは、コミュニティを助け合う仲間を作ること「出事」です。何か困ったときに助け合おうという仲間です。

この発想を1990年当時に持っていたとしたらすごいと思います。私が1990年にこだわるのは京都議定書の基準年だからです。このときはバブル末期でした。また、環境の問題というのもあまり考える人がいませんでした。みんな熱に浮かされたようになり、今よりもエコ商品もなく、携帯もPCありませんでした。エコカーも。でも、あの頃から比べて人口が増えているかということ、増えてないんですね。それなのに1990年から2009年の間19年、なぜかCO₂が増えているんです。この間人口は微減しています。エコ家電や車の環境性能はすごく上がっているわけです。おかしいですね。みんな環境問題

に関心があり、人口が減り、エコ家電、エコカーが増えて、どうして家庭部門でCO₂が40%も増えているのでしょうか。

1990年と2009年の大きな違いは家電が1人1台ではなく、1人が複数台持つようになったことです。1990年代終わりにIT革命があり、家電が爆発的に携帯電話とかパーソナルなものになってきました。つまり、我々はバラバラにされているんです。企業の儲けを考えると、一方で、エコ商品を浸透させつつ、儲けも確保しないといけない。そうしてみんなをバラバラにするんです。

その売り文句が「自分らしさ」「あなたらしさ」です。これが胡散臭い。私からするとSMAPも胡散臭いってことになります。オンリーワンとか言ってね。冗談ではなく、ほんとに胡散臭いと思うのは、みんなそれに踊らされているだけで、自分らしさではないんです。僕は助け合わなくちゃいけないのに、「自分らしさ」「あなたらしさ」という言葉にのせられて、自分探しとかはしないほうがいいと思っています。

例えば、新入社員がきて、「僕はこんなことができます」「こんな能力あります」とか言ったとしても、ボランティアの世界では、結局背が高かったら高いところのもの取られ、低いやつは潜らされるんです。そうやって、無償の「出事」の中だったら、自分らしさが見つかるんですよ。

でもそれが仕事になってくると、特に1990年頃からは能力主義の傾向になって、いろんな資格だとか能力が求められています。そうやって、心も分断されてきたんだと思います。

そうなる企業にとっては都合がいいから。複数台買ってもらえるお客さんが増えるから。

世の中はそういうからくりで満ちているんです。1990年のバブルの時代から、2000年代、次の世代を考えなければいけない時代になっている中で、そろそろ気づかないといけないことは、「助け合い」です。バラバラにされない強力なネットワークです。

このネットワークを仕事において築けないのであれば、ここで団結するしかないんです。または心を元に戻すしかないと思います。

家庭においても、今は、遠い親戚よりも近くのなんとかといいます、もっとリアルに、この皆さんのようにこうして集まっている仲間が近い存在になるわけです。なぜなら価値観が似ているから。価値観が似ている者で集まると役割が生まれます。

もう一度言いますが、1990～2009年の間に起こったことは、我々がバラバラにされたということ、それが企業にとって都合が良いということ。例えばモニター。僕個人も家にモニターが3、4台あります。部屋が2つしかないのにそんなに要りますか？ おかしい話ですよ。でも企業にとっては非常に都合がいい。

ここ数年、産業部門ではほとんどCO₂の排出が増えてない、なぜかという企業は努力しているからです。その代わり家庭部門では増えている。どんどん細分化されて1人で電化製品を何台も持つようになったからです。

そういう心までバラバラに分けるやり方は意味が無いような気がしてきました。自分のアイデンティティーを探すって何かっていうと、この「出事」の中で自分を再発見することではないかという気がしているんです。

2007年問題のときもそうですが、団塊の世代の方にはすごいチャンスがあるような気がしています。僕の知り合いの方で、60で定年退職すると思ったのに、定年を65まで延ばされた人がいます。すごくかわいそうです。僕は実感としては分からないんですが、理解できるような気がする。昨日の新聞で、こういう高齢者の問題がこれからやって来るとのっていました。

これからの社会とは年老いた自分も含んだ社会です。循環型社会形成とは年老いた自分も含んだ世の中を作っていくことですよ。

環境のことをずっとやっている中で、社会をどうやって作っていくかを考え、「出事」で仲間と助け合って生きたいと考えています。京都議定書も、CO₂の問題というより、個の分断の

問題だと思っています。助け合いが起きない限り、個が分断されつづけます。個が分断されなければCO₂の問題も解決できると思っています。製品のCO₂削減技術がどんなに進んで、たとえ3分の1になっても、1人が3つ電気製品持つようになったらCO₂総量は変わりませんから。

何か取りとめの無い話になってしまいましたね。ご清聴、ありがとうございました。

(この記録は、事務局・松井が作成し、ハッタ氏にご加筆・ご訂正いただいたものです。)

事務局からのお知らせ

【投稿募集】

『JUNKAN (循環研通信)』では、会員の皆様の投稿を募集しています。下記の投稿要領により、どしどしご応募ください。

内容：本会の活動に対するご意見・ご感想など

循環型社会や環境など、本会の趣旨に関連ある提案・評論・エッセイなど

記事の責任：著者の氏名を掲載することを基本とし、内容に関する責任は著者が負うものとします。文字数：800～3,200字程度(図や表を含む)。刷り上がり0.25～2ページ程度。

掲載の可否：掲載の可否につきましては、循環研事務局にご一任願います。また、編集の都合で、原文の趣旨を損なわない範囲で、一部修正をお願いする場合もございますことをご了承ください。

投稿方法：ワードファイルまたはテキストファイルにて、連絡先(住所、氏名、電話番号、emailアドレス)を明記したうえで、循環研事務局までメールにてお送りください。

郵送の場合は、循環研通信投稿と題記し、上記電子ファイルをCD-ROMあるいはフロッピーにてお送りください。

原稿の返却：掲載原稿および電子ファイルについては、原則として返却いたしません。

送付先：〒104-0031 東京都中央区京橋1-9-10 フォレストタワー

株式会社ノルド社会環境研究所内

NPO 法人循環型社会研究会 事務局 (Eメール: junkan@nord-ise.com)

2008 年度循環研セミナー

人間復興の経済社会へ

講師：田村 正勝氏（早稲田大学社会科学部教授）

日時：2009年3月11日(水) 18:30～20:30

会場：ノルドスペース セミナールーム（東京都中央区京橋 1-9-10 フォレストタワー）

1. 100 年に一度の危機？・・・100 年に一度の言い訳

人間復興の経済社会へという大きなテーマでお話します。いま「100 年に一度の経済危機」と言われていますが、これは「100 年に一度の言い訳」でもあります。この危機の根底にあるものを掘り下げてこのテーマに迫ります。

「100 年に一度の危機」と言われる前、日本経済は一昨年まで景気回復にあると言われていました。大企業はそうだったでしょうが、他では消費不況が深刻化していました。

ジニ係数×100 でみると、日本は1993 年は24.9、2005 年は38.7 です。この数字が大きいほど貧困の格差が大きく、不平等社会な社会だということを示しています。日本は、93 年には世界でいちばん平等な社会だったのが、12 年後には逆になりました。日本よりジニ係数が大きいのはアメリカ、ロシア、中国、トルコです。

これが小泉内閣の市場原理主義の構造改革路線がもたらした格差社会で、今は格差不況と言ってもいいでしょう。

小泉・竹中の経済政策が格差を拡大しているところへアメリカ発の金融不安がやってきました。不動産業と建設業を除けば何とかやっていた経済が、昨年10 月、11 月頃からまず車や家電など電機製品の輸出が猛烈に落ち込み、そして五里霧中に陥りました。そこでコストを下げろと人件費を切りました。いわゆる派遣切りを力のあるトヨタがやりました。それでどっと右へ倣えとなって消費不況はさらに深刻になっているというのが現実です。

これは「合成の誤謬」です。アダム・スミスは勤勉、節約の市民道徳を守れと説きましたが、



それでも大不況は周期的に起きました。ケインズはこれを合成の誤謬だと言ったのです。個人としては正しい行動でも、みんながそれをやれば物は売れなくなる。企業もコスト削減など利益を守る行為をみんながやれば購買力が落ち込むのは当然です。

100 年に一度というのはグリーンズパンが自然災害のように述べて政策の失敗を隠す言葉です。1929 年の大恐慌を念頭に置いた言葉でしょうが、では、いまの状況は1929 年と同じでしょうか。

アメリカの29 年の国民所得は811 億ドルだったのが、32 年は412 億ドルになりました。1932 年は恐慌が終わった年です。以下同様に比較しますと、鉱工業生産指数は100 から45.6 に、失業者は150 万人から1,350～1,500 万人になりました。今回は国民所得はほぼ横這い、鉱工業指数は最高時100 に対して95 程度、失業者は400 万人くらいで29 年とは様相を異にしています。でも、マスコミはまことしやかに100 年に一度の危機といい、経済人も便乗して言っています。

日本の現状を見ますと、2 極化がいつそう深刻になっています。小・中学生（公立）の就学

援助（学用品、学校給食、修学旅行など）を受ける率は最近4 年間で4 割増です。東京・大阪では4 人に1 人、足立区は42.5％です。また00 年から05 年までに、株式配当は2.5～4.2 倍、役員賞与は2.3 倍。賃金はマイナス5.5％、労働分配率は02 年の69.1％から低下が続き、現在は62％程度です。大企業では50％台にまで落ちています。

このように働く者の取り分を減らして、大資産家や経営者の収入を増やせば、格差が拡大するのは目に見えています。経済のグローバル化が進みアメリカから津波のように金融危機がやってきました。震源地アメリカは、3,700 万人が年収190 万円以下、3,500 万人が飢えを経験しており、子供の5 人に1 人が飢えているといえます。

日本も何もせず、放っておけばそうなります。これは経済そのものだけの問題ではありません。根本的には経済主義のイデオロギーが問題であり、すなわち経済の根底にある近代文明そのものを問わねばなりません。

2. 危機の本質は文明の分かれ道

(1) 成熟社会と近代文明の転換（危機＝分かれ道）

現在の経済危機は、近代文明の転換要因の1 つとしてとらえられると考えています。

クライシス（危機）はギリシャ語のクリノ、分かれ道を意味し、危機＝クラッシュ（崩壊）ではないのです。正しい道を選べばクラッシュにはなりません。そういう言葉本来の意味で現在は文明の危機（分かれ道）と言えらると思います。

近代化は「三つの解放（成熟社会）」をもたらしました。しかし、特に日本の場合は余りに急激に追求した結果、「三つの破壊」をもたらしたのです。

解放には①精神的抑圧からの解放②貧困からの解放③政治的社会的抑圧からの解放の3 つがあります。

①は、ウェーバーが言った魔術や迷信からの

解放です。合理的・科学的思考によって自由に考えられるようになった。②は、絶対的な貧困からの解放です。今の経済格差から貧困は再び問題になってはいませんが、工業化によって人類は絶対的な貧困から解放されたといえます。③の社会的抑圧というのは、法律に結婚の自由があっても、身分や出身が違ふとかの理由で結婚できなかったことなどを指します。

これら解放のほうは理解できますから、今度は「三つの破壊」をやや詳しく見ましょう。

破壊の①は、自然の破壊（大気・水質・土壌汚染）です。今の状態が続けば、長く見積もっても400 年で人類は破滅です。50 年以内に気温が1～2 度上昇して2～3 割の生物が消滅し、アルプスの氷河は3/4 が消えます。さらに日本の例をあげますと、熊谷はしばしば気温が40℃を超えていますし、東京は100 年前の鹿児島

島の気温になっています。水質は飲料水がPH4.8 になり、環境ホルモンは生物のメス化を促しています。私は64 歳ですが、いまの学生の精子の数は昔の学生の1/2 です。男子のメス化は世界的傾向で、20 年前にボンの大学で私が教えていた時から注目されていた問題です。

20 年前ですが、沖縄での学会で宇井純さんが、普天間基地の重金属の土壌汚染は「調査だけで10 年かかる」と言っていました。重金属の土壌汚染は腎臓ガン、肝臓ガン等を誘発します。ドイツで以前、土壌汚染地域をマッピングして、その地域のガンや臓器の病気の発生を調べたところ、その関係が証明されて、そこでその汚染土壌をよそに持って行って土を入れ替えたということがありました。どこにその土を移すかは問題ですが。

破壊の②は、地域共同体の破壊です。この問題の大きさは、阪神大震災で証明済みです。淡路島では地震動は大きかったですが、一人も死者を出していません。何処に誰がどのように住み救援が要るかどうか分かっていたからです。地域共同体が機能していたのです。それに反し、神戸、西宮は地震後、6,500 人が死亡しました。

うち 5,000 人は 1 週間以内に亡くなっていて、その 43% は 65 歳以上の高齢者です。淡路島のような地域共同体が破壊されていて、「隣は何をする人ぞ」で没交渉だったからです。

共同体はしがらみが強くてイヤだ、という觀念にとらわれず見直しが求められているのが現代です。

破壊の③は、精神・文化の退廃（破壊）（半文化・文化の乗合馬車、紙の使用量に比例する文化の退廃、個性を失ったゆえの「砂粒社会」「人間離脱病」）です。

人間の意識は氷山みたいに表に出た意識と下に隠れた無意識があり、共同体の破壊でホモエコノミクスは常に不安に苛まれています。それを誤魔化すために物質主義に走るのです。

フィリピンでの井戸掘りボランティアに行った早大の学生に、生まれて良かったと思うかと質問したところ、イエスと答えたのは 30%、物質的には貧しい現地の若者は 90% がイエスと答えました。早大に来る恵まれた学生でもそうなのです。つまり心が虚しい。そうすると物質主義に走るのです。

すでにゲートは、このまま行くと文化はなくなる、文化の名に値しない「半文化」になると警告していました。テレビも新聞も「100 年に一度の危機」と同じ言葉を繰り返す、まさに文化の乗合馬車、文化の喪失の姿です。

(2) 経済主義「思想」と近代国家「制度」の限界と市民社会の反省

日本の近代化は、ヨーロッパがその良し悪しを知りつつ 250 ～ 300 年かけ行ったのと違い、あまりに急速に走りました。

東北大で教えた哲学者、カール・デビッドが、第二次大戦でドイツに帰国する際に、日本は近代化のスピードがヨーロッパ先進国よりも三倍も速く、その良悪を知らずに進めたから破綻すると言明しました。そのとおりになって、広島・長崎はその悲劇の行き着く極致だと言えます。

では改革の道は何か。1 つは経済主義の克服であり、もう 1 つは中央集権国家制度の克服で

す。20 世紀は自由主義か社会主義かで争いましたが、どちらのイデオロギーも、経済主義と中央集権国家制度という点では同じで、自由主義経済か計画経済かの実現の手段が違っただけでした。

日本に即してみれば、経済主義の近代化は中央集権国家制度で行われました。東京帝大出の有為の人材が官僚になり、ヨーロッパの真似をして、上からの近代化を進めたのは周知の通りです。東京帝大を出た人は官僚にならなきゃいけなかった。東京帝大を出てフランス料理人になった人が批難されたなんて例もあります。

そこで近代文明を変えるためには経済主義と中央集権国家制度の 2 つを変えなければ危機からは脱出できません。

3. 国家制度・中央集権体制を超克する動きとコミュニティの再生

(1) グローバル化とボランティア

中央集権国家体制はいろんな意味で突き崩されつつあります。突き崩すのはグローバル化とローカル化です。グローバル化には良いグローバル化と悪いグローバル化があります。

資料にある「経済の国際化、政治経済秩序の国際化の弊害」とは、自然破壊、地域コミュニティ破壊、経済・生活基盤破壊・人権侵害（開発経済学の功罪）などのことです。

1960 年代の東アジアは 1/2 が森林でしたが、いまは 20% です。その他にも自然破壊の例をあげると、①インドネシアは住民の所有権が 10% 認められるだけで、工業団地を作るために追い出される。②世銀プロジェクトで 86 ～ 93 年に 200 万人が土地を失う、③三峡ダムでは 160 ～ 170 万人が土地を失うが代替地は 50 万人分だけ、④中国の水問題、アメリカの水（オガララ地下水層）問題と農業放棄、等々があります。

特に④ですが、中国では水問題が深刻で、多国籍企業が入ってきて生産のため水を大量に使い、その結果 2 万の農村で水がなく農業を放棄しました。世界でいま 12 億の人間が真水を飲

めず、毎年 400 万人が飲み水が原因で死亡しています。またアメリカのオガララ地下水層はテキサス州を中心に 8 州に広がるものですが、スプリンクラーで散水するアメリカ式農法で、地下水層が急激に低下し、同時に土地の塩分濃度が上昇して 10 年後にはテキサスの農業は 40% が放棄されると見られています。

多国籍企業の進出による都市スラムの形成も大問題です。90 年代の全都市人口 13 億人中 6 億人がスラム生活でしたが、2000 年には都市人口が 30 億人になり、そのうち 10 億人がスラム暮らしです。例えばタイのバンコクでは、ここに日本などの多国籍企業が進出することにより、農村から膨大な人口が職を求め出てきます。これらの企業に雇われなかった人は、スラム生活になります。

もう 1 つのグローバル化は「自然・人権および社会環境の保護と市民運動の国際化、コミュニティの再生」です。先述の問題の多い経済主義グローバル化に対して、中央集権国家の壁を突き崩し、経済主義の弊害を修正するグローバル化です。2001 年は国際ボランティア年が実施されました。自由貿易を推進するための WTO でさえも、EU の問題提起で「貿易と人権、貿易と環境」という委員会を置くようになりました。

これらもあって、①労働条件の悪化（中国の月給 8,000 円、民工潮・農民工の労働条件に向かう）、「下向きの競争」をやめ、「上向きの平準化」をはかる労働運動などの動きが出ています。

また、②「地産地消とグローバル輸送の大気水質汚染」ですが、地元の産物を消費するほうが輸送にともなう石油消費による大気水質汚染を防げます。それゆえイギリスを始めとして「フード・マイル」も導入されました。

それから③「適正価格の店、植林、女性シェルター、肥料監視、水、教育、健康、衛生、ETC・ボランティア」です。

適正価格（フェアトレード）は、安全で持続的な生産を保障します。パキスタンの絨毯の例

で言うと、輸入商社などが徹底的に安く買い叩くわけです。それでは絨毯を作っている女性や子供が食べていけない。それをドイツのボランティア団体が適正価格で買いましょうとって、それをドイツで売ることを始めました。適正価格で買うのは、普通の店より 3 割～ 4 割高いが、「我々はフェアトレードゆえ高い」と説明すると、こういう適正価格の店が瞬く間に広まって 300 軒くらいできました。

女性シェルターというのは例えば、バンコクから女性が日本に来て不法就労の形で働き、夜の仕事が多い。怖い兄さんがピンハネしても訴えられない。不法就労で本国送還になるからです。そこで日本の女性ボランティアが、そういうケースのいわば「駆け込み寺」を作ってバンコクのボランティアなどと連携している。

このようなグローバル化は、経済主義のグローバル化の弊害を修正すると同時に、中央集権国家体制を崩すことにつながるのです。

(2) ローカル化とボランティア・・・地域の見直しとコミュニティの再生

もう 1 つ、中央集権国家体制を崩すのはローカル化です。ローカル化は 2 つの理由から進みます。

民主主義は「支配者と被支配者の一致」ということですが、それには中央集権でなく地方分権を進め、行政や政治の中心が住民のすぐ近くにあり、誰もが参画できる型が必要です。現在、日本は遅れていますが、地方分権は世界的な流れです。このようにローカル化が進みます。

ローカル化が進むもう 1 つの理由は、ローカル色豊かな文化を尊重することです。これにより一国の文化も豊かに形成・維持・継承されます。いままでは日本文化、ドイツ文化、フランス文化など「国家文化」を創ろうとしてきましたが、そんなのは本当の文化じゃないということが分かってきた。真の文化＝ローカル文化です。

中央集権国家を作るときはまず標準語を作ります。そして教科書を統一する。最後は小学校

の唱歌です。これでローカル色を削っていく。「ノウサギ追いしかの山」の「故郷」に歌われるのは、「日本の共通の故郷」なのです。「われは海の子」もそうです。どこの海岸の歌かわかりません。それがミソなのです。これは近代国家を創るときの常套手段で、どこの国でもやったことです。それを日本も真似したのです。

このようにして国家文化を創り、中央集権国家体制を創ってきた。しかしいまやこの体制を崩さなければならない。そういう意味でもう一度ローカル色の豊かな文化の見直しが進みます。

このように「民主主義」と「文化」の双方から、世界的にローカル化が進んでいます。

(3) 地 域（固有）の国際化（Vernacular-universalization）：コミュニティの再生とボランティア

一方ではグローバル化が進み、他方ではローカル化が進むと、国家がバラバラになるんじゃないかという気もしますが、そうではない。この2つは結局同じところに向かうのですね。

「地域固有の国際化」という造語は私が作りました。21世紀の国際化はローカル化が進んで自律した地域どうしが、海外も含めていろんなネットワークでつながる。自律した地域間の固有の国際化です。

産業だけでなく、福祉などでも「地域固有の国際化」が可能です。例えば「フィリピン・盛岡福祉見本市」があります。これは盛岡の身体障害者のお世話をするボランティアが、小中学生に廃品回収をやってもらい、これを身体障害者に繕わせ、フリーマーケットで売って、その売上で、身障者とボランティアによる「いきいき牧場」を創った。

他方で売れ残ったものをフィリピンの福祉団体に送ったところ、フィリピン側は経済大国の日本がなぜこんな古物を送るのかと怒ったが、事情が分かったらフィリピンの福祉団体も同じことをやり始めました。それで今度はフィリピンから、売れ残りを盛岡に送り、「フィリピン・

盛岡福祉見本市」を盛岡のデパートでやりました。それが成功して、盛岡市民の大勢が、フィリピンの、学校に行けない子供たちの「あしなが小父さん、小母さん」となり、フィリピンのストリートチルドレンで学校へ行ける者が増えました。

(4) 少子高齢化社会における市民生活とコミュニティの再生

日本は2015年には、4人に1人が65歳以上で、1人暮らしの高齢者と夫婦ともに高齢者である世帯が1,000万以上になります。現在65歳以上が1,900万人ですが、これは平均値で、過疎地では現在すでに65歳以上が半分以上の限界過疎地が国土面積の54%を占めます。そうすると、健常者中心の社会の転換、新たな地域づくり、新たな技術づくりが不可欠になります。この転換ができなければ、長寿は最大の苦痛になります。

一方で少子化による一人っ子が増えて、殆どが長男・長女夫婦ということになってきますと、1夫婦4人介護で、これは女性だけでは不可能です。男女共働き、男女共介護じゃないといけません。それができる企業や社会に早急に変わらないとどうにもなりません。

次の2つが大切になります。①地域社会・ボランティア介護の役割増大（郵便局網を利用した「相互介護貯金ボランティア」）②地域共同体とヒューマンイズムの回復。

若い人は、両親の介護問題に関しては、諦め気味に受け取っていますが、しかし介護は辛い労働ではありません。

日本人の平均寿命を考えると、60歳まで働き、あと約30年は思いのままに過ごせる可能性が皆に開かれています。それが現実となるためには、定年までに「しゃきとした身体と頭脳」を創らなければなりません。会社人間ではだめです。企業も早急に変わるべきです。

60歳を過ぎれば、それほどお金もかかりません。資料にPPKと書いていますが、それは「びんぴんコロリ」、PPPは「びんぴんポックリ」

です。つまり85歳過ぎまで元気でいて、その後倒れたら1週間か10日病床にいてお迎えが来る。逆に60歳でボケたら、その後の30年を若者の世話になって生きることになりますが、これは本人も支える若者も悲惨です。いま経済政策であろうが何政策であろうが全て、PPKに焦点が合っていないきゃいけない。それ以外はほとんどが余計なことと言ってもいいでしょう。

4. 克服されるべき経済主義

76年から86年の10年間ではGDPは2倍になり、輸出は3倍になりました。76～06年の30年間ではGDPは3倍、輸出は6.6倍になりました。しかし実質家計消費は7%の伸びです。したがって労働時間を半分にして、GDPが半分になっても、その痛みを平等にすれば、家計消費は3.5%減少するだけです。それゆえ国民の生活水準はほとんど不変で、むしろより良い生活となる。実質家計消費の3.5%の節約は、食べ残しをやめ、消灯をこまめにし、車から自転車に変えるなどすれば、簡単にクリアでき、環境に優しく、かつ人間らしい生活となります。でも今は特定の人にだけに痛みを押し付けているので、自殺者が11年連続で3万人を超える事態となっています。要は経済社会構造の問題です。これを変えないとダメです。

70年代半ば以降に日本は「成熟飽和経済」に入りました。生産力が成熟し、これをフルに使ったら、国内では絶対に消費しきれないほどに生産力がつき、消費も飽和状態になった。にもかかわらず、アメリカ式にモア・アンド・モアの経済を続けて輸出一辺倒になりました。その結果、人の心身体さらには文化さえも破壊してきたけれど、加えて経済自体も壊れてしまいました。それは次のように段階的に窮地に追い込まれたのです。

国内消費が飽和したから今度は輸出にかけ、過剰生産、過剰輸出です。すると、円高・過剰マネー⇒バブル経済⇒繁昌貧乏不況・空洞化経済⇒金融不安不況という悪連鎖が発生します。

次に空洞化するわち海外組立工場進出にともない、部品や機械を海外工場に持っていく。これは、いわば「企業内移転」ですが、これも輸出にカウントされます。それゆえ海外進出はいっそうの円高を呼び、それゆえ、いっそうの海外進出という悪連鎖に陥りました。

さらに、これを避けるために海外組立工場が、部品や機械を現地や海外で調達するようになった。それゆえ日本国内はいっそう空洞化し、日本の下請け中小企業は厳しくなって国内経済全体が停滞をする羽目となった。

ドイツも60年代終わりに「成熟飽和経済」に入りましたが、ここでは無理をして成長経済を維持することをやめ、徹底的に「時短とワークシェアリング」を推進しました。

他方でアメリカは60年代初めまでに「成熟飽和経済」に入りましたが、モア・アンド・モアの国ですから今度は、軍需産業に頼って成長経済を維持する。ベトナム戦争からイラク戦争まで続きました。しかし東西冷戦が終わり、それまでどおりの軍需生産を保てなくなり、軍需産業に雇われていたITの専門家を金融が引き抜いて、ITにより金融商品を作らせ、金融ビッグ・バンを世界に広め、この金融商品を世界中に売りまくった。それが今日の金融不況の根本です。

5. ファンド資本主義と金融システムの危機

(1) 露呈した世界金融システムの欠陥・・・疑心暗鬼で崩壊

破綻したロングターム・キャピタルマネージメントは、レバレジ（てこ）方式で22億ドルの基金で金融商品の運用は1兆2500億ドルでした。じつに集めた金の600倍の運用をした。常識で考えれば破綻するのは分かると思うんですが、それさえも考えられなくなってしまった。

サブプライムローンは、100兆円と言われていますが、世界の金融資産1京7000兆円に比べれば、たいした額ではない。それがなぜこんなことになったのか。その不良債権を買い取っ

た金融機関が、細かく刻んで他の証券に組み込んで新たな金融商品を作って売る（債権の証券化）。これを買った銀行や証券会社が次々と同じことをやりました。

このような証券は信用があるうちはよいですが、信用がなくなったとたん疑心暗鬼で投げ売りされる。要するにこのような「債権の証券化」は、ババ抜きのババになる。私は10年前に「債権の証券化をリスク分散なんていっているが、あれは不特定多数にババを引かせるものだ」と言いましたが、その通りになりました。

(2) 世界的な金融危機と日本の金融機関・・・地銀の苦境と大手金融機関のリスク

株が暴落していますが、これは日本の政策ミスです。竹中大臣が不良債権の直接償却をやりました。直接償却というのは、貸し出しても、その企業の調子が悪かったら融資を打ち切って、担保の土地や株式を売って銀行の資産にしてしまう。これをやると土地や株式が投げ売りされて土地や建物が暴落します。日経平均株価も7000円台に落ちました。

そこで、海外ヘッジ・ファンドが安くなった日本の土地や株を買いました。ファンドに誰がカネを提供したか。それは我々が提供しているんですよ。日銀はゼロ金利を続けたから、海外ファンドが邦銀から円を借り出し、それで日本の土地や株式を買って儲けた。損しているのは日本の国民です。我々はゼロ金利のために貯蓄の利子所得が、90年代から今日まで300兆円も奪われたことになります。

アメリカも6%の金利を2.5%まで下げて消費を煽りました。金利が下がるとドル安に進むのですが、ドルを下げさせないために、日本の金利を上げさせないようにしました。もう1つ日本の政府・日銀は、2003年にはアメリカ国債を33兆円も買わされた。その資金を短期の借り入れで手に入れたゆえ、その分だけ日本の市場から円がなくなっている。そこで日銀は量的緩和といって35兆円を市場に戻した。それをまた海外ファンドが吸い上げて行った。

ところが今回は、海外ヘッジ・ファンドが自国において、サブプライムで大穴を開けたから、これを埋めるために、持っている日本株を売った。それゆえ株が下がった。さらに日本で借りた円を、円高になる前に早く返そうとして、世界中で円買いをした。そこで1ドル90円の円高となった。

6. 「市場原理主義」から「協同体制」の業界秩序へ

日本には大きな問題があります。自殺の問題は日本が飛びぬけて深刻です。

警察の自殺の定義は、自殺して当日に死んだ人だけをカウントします。その翌日以後に亡くなった人も数に入れると、年間5万人以上が自殺です。つまり戦争もテロもない日本で55万人がこの11年間に亡くなっています。イラク戦争での死者は10万人と言われていますから、如何に大きな数字か分かるでしょう。

日本の自殺者数は世界でほとんど最悪です。10万人あたりの自殺者数は、94年は16.9人、99年は25人です。05年27人、06年23.7人、男性だけでは40人と世界最悪です。ちなみにEU諸国では、イギリスやイタリアで8人ほど、最高のフランスでも17人です。

日本の自殺激増原因は2つ、ITと成果主義賃金です。

そこにILOのレポートがありますが、ITの導入のためアメリカでは毎年、生産年齢人口の10人に1人がうつ病にかかり、イギリスでは10人に3人が精神的な不調を感じている。EUでは、うつ病対策に毎年、域内GDPの3～4%が使われています。GDPの3～4%というと、日本で言うと20兆円をうつ病対策に使うことになりますが、日本は何にもやっていません。

以前、日本経済政策学会の全国大会に竹中平蔵が、IT問題で基調報告をする予定でした。私は、次の3つの質問を用意しました。①ITのコスト生産性は？②その導入で雇用は増えるか？③どのような社会問題が発生するか？答えは①1人当たり労働生産性は上がっても、コス

トが膨大にかかり、コスト生産性はアメリカでも低下している。②企業は人件費を減らすために導入するから、雇用はむしろ減少する。③ストレスや自殺者の発生、等々です。

結局、彼は当日ドタキャンして報告をしなかったので、小生が資料を提供して説明したのですが。

うつ病はアメリカでも深刻で、米屈指の大学院生の3分の1がうつ病の薬を飲み、3分の1はうつ病的だが薬を拒否、残りの3分の1だけが心の病を患わずに勉強だという。日本でも20代の女性の15%が自傷行為（リストカット）の経験者です。

なぜそうなるか、私に言わせると結局、ITと成果主義で企業が「すなつぶ化」してしまったからです。それで心の病は年々増加する。「すなつぶ化」というのは①コミュニケーションの欠如、②助け合いの欠如、③仕事の個人化、④仕事の義務と権限の曖昧化です。

日本では29～39歳の死亡原因の第1位が自殺です。全公務員（全ての年代）のそれは第2位です。ではどうしたらいいか。かつてあった「共助システム」を回復することです。

格差是正と共助により「中負担高福祉」が可能です。住民が自発的に助け合う「共助」の仕組みの協力を以下に例示します。

①市民の手による高齢者や身障者介護ボランティア。かつて介護にも様々な共助システムがあったのに、グッドウイルやコムスンなどが介護事業に儲け本位で入り、壊してしまいました。そのほか、②有機農業と直売所、③住民の手による「まちづくり」、④廃棄物リサイクル、⑤環境保護、⑥地域通貨、⑦起業、⑧里山や林業の見直し、⑨カウンセリング、⑩介護ボランティア預金、等々です。

⑩は、例えば私が介護ボランティアを東京で2時間すると、故郷の松本で、誰かが母の介護を2時間してくれる、というような仕組みです。

残念ながらかつてあった「共助」の仕組みは最近の「市場主義原理主義」の政策によってズタズタに壊されました。これをもう一度取り戻

せばそんなにお金をかけなくても「中負担高福祉」が可能です。

さて、自由経済はうまくいくはずだったのに1929年の大恐慌に陥り、行政が経済政策や社会政策をやらざるを得なくなった。これを契機に次第に公共セクターのウエイトが増し、やがて「福祉国家」となりましたが、これは70年代にコストの限界にぶつかり、この「公助システム」も難しくなった。

そこで2つの方向がとられました。1つはサッチャーやレーガン政権のように、全て市場セクターに戻す方向です。そうすると2極化が進みました。小泉・竹中路線は2周遅れでその真似をした。それゆえ90年代の初めまで世界でもっとも平等な国の1つであった日本が、今じゃ米、中、露について4番目の格差社会に成り下がった。

もう1つはイギリス以外のEU諸国がとった方向です。ここでは福祉・介護を地域の「共生セクター」に戻しました。

日本では間違った政策により、共生セクターが失われたゆえ、もう一度「共生セクター」を重視していかねばなりません、もちろん、これだけではダメです。公共セクター、市場セクター、共生セクターの3つのバランスがとれた社会が理想的です。

もう1つ重要なのは、企業の社会的責任です。社会的責任を果たしていない企業は、やがて、やっていけなくなる。

社会的責任投資（SRI）とありますが、これは社会的責任を果たしている企業の株だけを買うという投資です。労働条件をきちんとしているか、環境に配慮しているかなど、社会的責任を果たす企業の株だけを買うというSRIが、かなり広まってきました。

イギリスは2000年の年金法改定以来、年金基金総額で80%をSRIにすることになりました。もしイギリスの年金基金が、例えばトヨタや日立的株を持っていたら、売らなきゃいけない。これらの企業は、法令違反までして非正規社員をカットしていますから。これは何もトヨ

タや日立だけの問題ではありません。

ドイツ、オーストリア、ノルウェーも同様に年金法の改定をしています。もし、これらの国の年金も日本の企業の株を持っていて、日本企業の実態を知ったら、いずれも日本の株を売らなきゃならん。そうすると株が暴落しますよ。日本の株の30%はいま海外が買っているのですから。

経営者は工場の草取りをさせてでも雇用を護るべきとありますが、昔は日本の会社はそうだった。それがこの数年間の間にアメリカ式の株主主義の考えが入ってきて、企業はステークホルダーみんなのモノということを忘れてしまった。自分で自分の首を絞めて長期的な利益を損なってしまった。

市場原理主義も変えねばなりません。ドイツ、アメリカでも卸売物価（日本では企業物価）が30%も上がっているのに日本は10%も上がっていません。日本の大企業や大型販売店は、原材料価格が上がっても、上がった分の価格を下請け企業に上乘せさせません。だから中小企業が倒産していくのです。

いまは価格も賃金も上げるべきです。つまり正常な経済に戻すことが大事です。それには自由経済だけではできません。賃金、労働時間、企業の環境配慮など、その他全てについて、事業者組合、労組、消費者組合、行政が話し合う「協同体制」をとって、新しい社会を創っていくことが大事です。

成熟飽和経済、環境問題、少子高齢化、ステークホルダーの社会的資産などを考えると過当競争をやめ真の自由競争にしないとはいけません。

本当の自由競争とは「秩序ある競争（orderly competition）」です。権利と義務、私益と公益の両立をはかり、大いに開かれた話し合いをするということです。業界のエゴではいけません。消費者にも行政にも開かれた話し合いをする。談合はダメだダメだと言うけれど、そうじゃない。談合しなかったら最終的に1社の独占になってあとはみんな潰れちゃいます。

談合という言葉はもともと江戸時代中期にできた言葉です。無礼行の許されるお祭りの夜にいいカップルができて、その結婚がうまく行くために男子青年部と女子青年部の代表が、兩人の家へ行き、話し合い、まとめる。それを談合と言っていたのです。このように本来、談合はいい意味だったのを教養のないエコノミストが変な意味に変えてしまった。

7. 来るべき社会のヴィジョンとコミュニティの再生

「公正」な社会は、次の3つの原理がうまくミックスしている社会です。

まず、10 働いた人には10を、5の人には5をとという「交換の正義」、つまり自由の原理です。しかし、これを徹底すると格差社会になります。「交換の正義」だけで社会を創ろうとしますと、強者の自由は残りますが、それ以外の者は皆強者に服従するという、全体的に見ると不自由な状態になります。自由を徹底すると不自由になるのです。

そこで自由の原理だけではだめなので、「必要に応じて分かちあう」という「分配の正義」が必要になります。つまり平等の原理です。ところが、「分配の正義」だけで社会を創ろうとしますと不平等になります。なぜかという人間は一人一人違いますし、サボる人も出てきます。サボっても必要に応じ分け与えられるんだと思っちゃうと頑張らない。そうすると分け与えたくても絶対量が不足します。

不足するとどうなるか。権力者が先取りします。ソ連時代のウクライナのように官僚や権力者が先取りして、穀倉地帯なのに餓死者が発生するなんてことが起こるんです。平等を徹底すると不平等になります。いい加減の「そこそこ自由、そこそこ平等」というのが必要です

もう1つ「公正」に必要なのは「機会の均等」です。「交換の正義」、「分配の正義」、「機会の均等」の三原理の柔軟なバランスがとれた社会こそが「公正な社会」です。

「交換の正義」は市場に委ねればある程度実

現しますが、「分配の正義」と「機会の均等」は行政がやらなくちゃいけません。

しかし、行政は税金に依存し、やり方が画一的になるという限界があります。そこで公正な社会のためには、もう一つ、市民の自発性に基づく「社会的連帯」が不可欠です。とりわけ市民のボランティアが、結果的に行政の限界を補完します。

したがって、これからの社会は、「ゆとり、公正、連帯」の社会ヴィジョンを「市場、行政、ボランティアの三位一体」が推進する社会です。

8. 発想の転換による経済主義の克服と総合的生活

オランダでは「同一価値労働は同一賃金・社会保障」で次の①～④の型を組み合わせています。

- ① 週36～38時間・週休2日の「フルタイム労働」
- ② 30～35時間労働・週休3日の「大パートタイム労働」
- ③ 週20時間の「ハーフタイム労働」
- ④ 臨時労働の「フレキシブル労働」

日本も「オランダ型の時短・ワークシェアリング」で、非正社員などの労働条件の「上向きの平準化」をはかれば十分やっていけます。これによって経済主義を克服することが不可欠です。

経済主義を克服するには新たな認識方法とパラダイム転換が必要です。資料にQ&Aがありますが「Q：経済主義のイデオロギーを克服するにはどうしたら良いのですか。」「A：そのためにはまず、“モノの見方や考え方”・・・パラダイムを転換させること、そしてエコノミック・アニマルから人間の本来の姿に戻ること、そのために自分の生活を変えてゆくことが基本です。」と書いています。

では、新たな認識方法とパラダイム転換のためにはまず、「総合的な認識・思考」をとりましょうということになります。いまは「数量(定量)主義」思考に陥っていますが、これを改め

「定性志向」も重視するべきです。

例えばこの窓から人が落ちて亡くなったとします。なぜか？と聞いたときに、落ちた人の重心が窓枠から2分の1以上はみ出したからだというような説明をするのが数量思考。落ちた理由が、借金か失恋のあまりか、リストラかなどその理由を問いません。いまの企業では、こういった類の思考が支配している。

それから「二項対立思考から即非律へ」。自由と平等は対立するのみでなく、一体なのだと見ること。光と影も単独では現れない、一体です。私がここにて周りに、皆さんがおり、コップや机がある。私以外の全てのヒトやモノが私を支えているという見方。これを突き詰めた考えを「即非律」と言います。私＝A、私以外＝非Aとしたときに「Aは即ち非A」だという考え方です。

さて「人間」についても、このような総合的な思考をしましょう。人間も2つの総合的な存在だと言えます。まず人間は①心、身体、環境（自然的、社会的）の三位一体の存在だということです。人間は心と身体と環境の三つの交点に存在し、三つのどれかが変わると他も変わる、瞬間瞬間で変化していく存在です。

2つ目は、人間は理性的、工作的、遊戯的、欲求的、霊的な総合的存在ということ。人間は生まれながらに何でもできるような総合的な存在だということです。キリスト教で、人間をミクロコスモスととらえて、宇宙（マクロコスモス）の相似形つまり総合的存在だと言います。華嚴経にも「一即一切」という考えがあります。どんな小さな命にも、宇宙の一切の命が詰まっているという考え方です。

しかし戦後日本はアメリカナイズされて、本来の「総合性」を削って専門馬鹿を創ってきました。専門的になれば、いい会社に入れて楽な暮らしができるなんて考えた。これも経済主義のイデオロギーです。多くの経済学者が「世の中全て需要と供給だけで決まる」なんて思っている。専門馬鹿です。もっと総合的に考えなくちゃいけないということです。

心、身体、環境の三位一体の総合性、生まれながらに持っている総合性を取り戻そうということになると、ホリスティック・ライフ（総合的な生活）をしなくてはいけません。

生活を家庭生活、労働生活、自由時間（余暇生活）、地域生活と分けた場合、どれが欠けてもだめです。基本は健全で明るい家庭ですが、明るい家庭が、職場を明るくします。明るい家庭のためには余暇も必要だし、地域でも運動会に出て走るとか健全な地域を創る努力も必要です。

これら全てのバランスが重要です。このバランスは中庸や中間ではありません。職場に行ったら職場のことだけ、家に帰ったら職場のことを忘れて徹底的に家庭を大切に、余暇に際しては仕事や家庭のことを忘れ余暇に徹するというように、「メリハリのある生活」つまり「柔構造のバランス」です。

また、「進歩史観」から「ここで、今（hic et nunc）史観へ」と書きましたが、悪い進歩史観者は、例えば、「余暇が大事なのも分かるが、いまは家のローンがあるから残業を続けて対処する」という。こういう人は生涯、オーバーワークから抜け出せない。意志の問題です。

「hic et nunc」というのはラテン語で、英語の「here and now」です。キリスト教の本質は「hic et nunc」、「ここで、今」を自覚することだとアウグスティヌスというお坊さん（哲学者）が言いました。

道元も似たようなことを言っています。「有事而今（ウジノニコン）」。「これは、全ての事物が、今ここに有るという自覚に立ち、現在の生を精一杯大切にすること。つまり過去は「思い出している追憶の今」として現在にある。将来は「希望の今」として今ここにある。

人間は食べて、寝て、子孫を育てるだけではありません。これでは他の動物と同じです。人間は「真・善・美・聖」などの価値欲求も追及する。これが「大地に立って点を仰ぐ」という縦の線。しかし、それは自分ひとりではできませんから、家庭を、企業を、社会を形成して価

値欲求を追及します。これが「友と手を携える」という横の線。そうした社会は過去、現在、未来と歴史的に展開されますが、その歴史を示すのが斜めの線。人間はこれら3本の線の交点に立って、常に変わりながら生きていく「総合的存在」です。

（この記録は、吉田忠義氏が作成し、田村氏にご加筆・ご訂正いただいたものです。）

ワークショップ活動報告

▶ エココミュニティワークショップ報告

エココミュニティWSの4月からの活動としては、生物多様性に関する取り組み事例研究と中央区の環境活動との協働です。

前者の生物多様性に関する取り組み事例研究については、インドネシアのジョグジャカルタで15年にわたって行なわれているロイヤルシルク財団の野生の蚕（かいこ）の利用と森林再生の取り組みについて循環研セミナーでご紹介させていただきました。そして、セミナー講師の同財団特別アドバイザー黒田正人氏を案内役に「循環研フィールドワーク in ジョグジャカルターインドネシアの野蚕開発とジャワの森の復活」という循環研初の海外でのフィールドワークを企画いたしました。10月7日～11日の開催ですので、みなさん奮ってご参加ください。

後者の中央区の環境活動との協働については、環境区民会議に参加するとともに、事業所における二酸化炭素排出抑制策と連動したセミナー「基礎から学ぶ建物の省エネルギー」を受講しました。今後も中央区の環境への取り組みとの具体的な協働の機会を探っていきます。

秋からはまた、エココミュニティの要件研究等の原点に返ったワークショップ活動を展開したいと思いますので、会員のみなさんのご参加をお待ちしています。

（エココミュニティWSリーダー 久米谷 弘光）

▶ CSR ワークショップ報告

「環境コミュニケーションワークショップ」から名称変更した「CSR ワークショップ」は従来のように報告書への情報開示の在り方からCSRの活動の在り方にまで領域を拡大し、調査研究、提言していくこととして活動を展開しています。

本年度は、現在私たちを取り巻く社会的課題を抽出し、CSRの視点から企業はどう対応すべきかを明らかにしたうえで、具体的にこうした課題に対応している企業例を取り上げて評価する作業に入っています。現在、社会的課題を抽出し、企業の取り組みに対する評価軸を決める作業に入っています。今後、企業の取り組み事例を探し、調査することになっています。

一方、例年行っている報告書の動向分析の作業にも取り掛かっています。調査項目は昨年より若干増えています。2008年度は世界的な経済危機に直面しましたが、こうした中、企業はCSRにどう取り組んだのかが問われています。今後のわが国のCSRを考える上で、2009年版の報告書分析はさまざまな材料、視点が提供されるものと思います。

これら2つの調査、研究は恒例の年末のセミナーで報告する予定です。

（CSR WSリーダー 山口 民雄）

▶ 棚田・森づくりワークショップ報告

2009年度も棚田・森づくりワークショップでは、大山千枚田での棚田オーナー活動を行っています。

今年も参加者は多種多様で、循環研会員の方から会員ではない方まで、中にはお子さま連れでご参加くださった方もいて、たくさんの方々と一緒に汗を流して作業を続けております。

どなたでも参加できますので、興味のある方はぜひ一度お問合せください。

【2009年度 活動日程】

5/2（土）	田植え〔終了〕	15名の参加がありました。
6/7（日）	草刈〔終了〕	6名の参加がありました。
7/5（日）	草刈〔終了〕	6名の参加がありました。
8/9（日）	草刈〔終了〕	7名の参加がありました。
9/5（土）	稲刈〔終了〕	11名の参加がありました。
10/4（日）	収穫祭	〔参加者大募集!〕

【田植え、草刈作業の集合写真】



各作業の活動報告は、ホームページで紹介していますので、興味のある方はぜひご参照ください。
http://www.nord-ise.com/junkan/ws_tanadamori/tanadamori.html

（棚田・森づくりWS事務局 大澤 由紀子）